

# 音楽Ⅱ・音楽Ⅲ・総合芸術選択生へ④

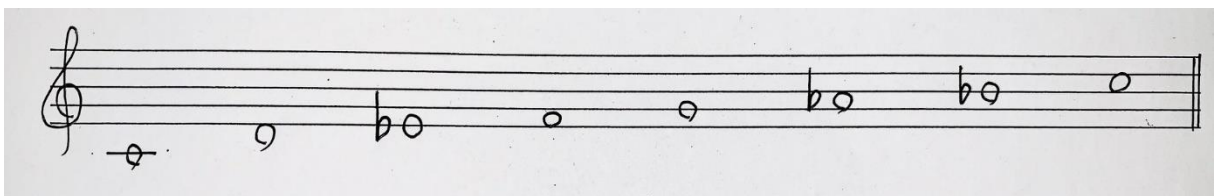
音楽科 古川

## 音階②

4回目は、**短音階**についてです。短音階は長音階の第Ⅵ音を主音にした音階で、**自然短音階**、**和声短音階**、**旋律短音階**の3種類があります。長音階と同様に順を追って説明していきますが、規則なので覚えることです。皆さんはピアノでハノンを弾いていますが、ハノンには長音階、短音階、カデンツがスケールにありますね。全て理論で説明できることですのでしっかり理解して下さい。音楽はただ慣れればよいというものではありません。理由が存在しています。理論が分かれば意味が分かります。

### 1. 短音階(moll)

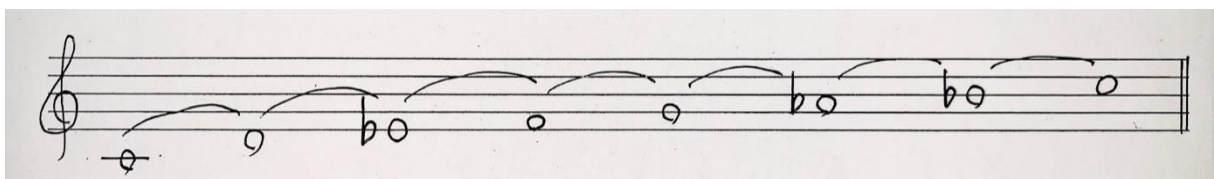
下記はCを起点(Ⅰ)とする短音階です。



Ⅰ      Ⅱ      Ⅲ      Ⅳ      Ⅴ      Ⅵ      Ⅶ      Ⅰ

この音階の各音がどのような秩序(音程関係)によって配列されているか見てみましょう。

長2度   短2度   長2度   長2度   短2度   長2度   長2度



Ⅰ      Ⅱ      Ⅲ      Ⅳ      Ⅴ      Ⅵ      Ⅶ      Ⅰ

この音階を長音階と比較すると、短音階は、同名の音を起点(Ⅰ)とする長音階のⅢ・Ⅵ・Ⅶの3つの音を、変化記号によって半音低くしたものと言える。

Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ Ⅵ Ⅶ Ⅰ

主音 下屬音 屬音

そして、長音階と同様、音階のⅠを主音、Ⅳを下屬音、Ⅴを屬音と呼ぶ。

注)短音階のⅧは、臨時記号によって半音上げられ、主音と短2度の関係にある時のみ導音と呼ばれる。

※短音階はすべての幹音、派生音(ダブルは除く)を主音にして作ることができる。

Aを主音とする短音階(a moll)

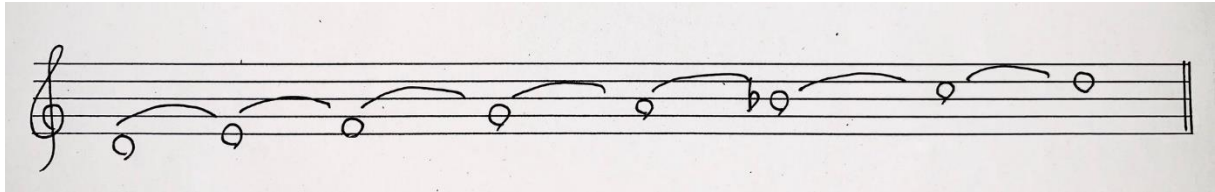
長2度 短2度 長2度 長2度 短2度 長2度 長2度

Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ Ⅵ Ⅶ Ⅰ

主音 下屬音 屬音

Dを主音とする短音階(d moll)

長2度 短2度 長2度 長2度 短2度 長2度 長2度



I II III IV V VI VII I  
主音 下属音 属音

## 2. 自然短音階

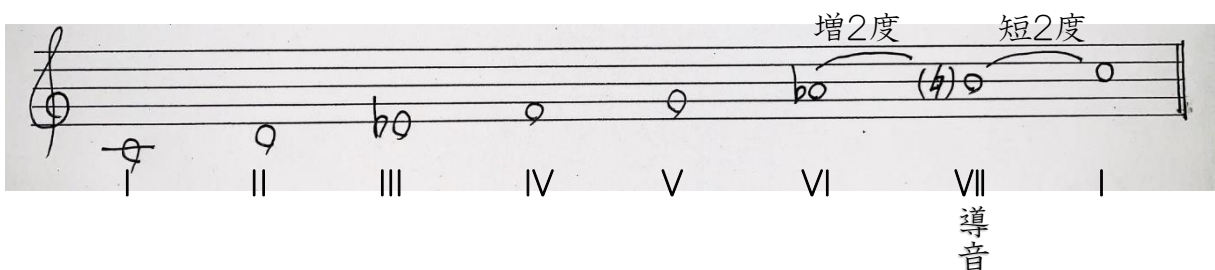
これまでのべた音階は、いわば短音階の原型であって、自然短音階という。もっと単純に言うと、長音階の第VI音、または長音階の短3度下の音を主音として、調号はそのままで音階を形成した場合、それを短調の自然短音階という。

長・短音階によって作曲する場合には、必ず導音が必要になる。長音階のVII音はそのまま導音として用いれるが、短音階のVIIは主音と長2度をなして、そのままでは導音として使うことができない。曲中に導音の必要が生じたとき、そのつど、音階のVIIを臨時記号によって半音高く、導音として用いる。

## 3. 和声短音階

自然短音階のVIIを臨時記号によって半音上げ、導音としたものを和声短音階という。

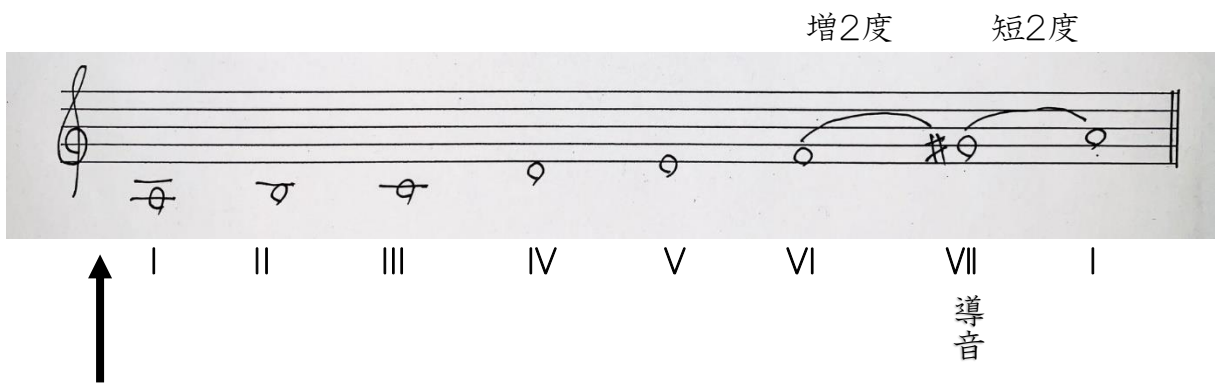
Cを主音とする和声短音階(c moll)



C を主音とする場合、短3度上の音が Dur(長音階)の主音になる。ということは Es(変ホニ♭)が主音だから変ホ長調(Es dur)がこのハ短調(c moll)のペア(※)になり、調号はフラット3つ(シミラ)です。この「シ」にはフラットが付いているので上記の楽譜のようにナチュラルを書いて半音上げなければ、和声短音階として成立しないということです。

※このペア関係には名前がありますがそれは「調」の単元でお話します。

A を主音とする和声短音階(a moll)



上記にみるように、和声短音階のVIとVII(導音)は**増2度**、VIIとI(導音と主音)は**短2度**となる。他の音階各音の音程関係は自然短音階と同じです。

短音階を考える場合、長音階の調号が必要になる。これは逆でも言える。a moll のペアは A の短3度上の C が Dur の主音だから Cdur の調号を考える。すると調号は無い。和声短音階にするには導音が必要だからVII音のソに♯がついて半音上がる。

「半音上げる」を理解して欲しいのだが、元々何も調号が無いのであれば半音上げるために**シャープ**を使う。元々フラットがついているならば、**ナチュラル**を使う。元々シャープがついているならば、**ダブルシャープ**を使う。半音上げるは自分で見て判断するのだ。

**※和声短音階は上行しても下行しても導音が半音上げられるのは変わらない。**

ちなみに、長音階は○dur(○長調)、短音階は○moll(○短調))というが、基本、ドイツ式では大文字は長調、小文字が短調となる。

## 4. 旋律短音階

短音階において、旋律が音階各音を順次上行し、VII→I(主音)とすすむ時、VIIIはやはり導音でなければならない。そこで、VIIを臨時記号によって半音上げ、導音とするとVIとのへだたりが増2度となる。(和声短音階ということ)

増2度は半音3個に相当し、他の隣接する音階各音間にはみられないへだたりになる。

半音2 半音1 半音2 半音2 半音1 半音3 半音1

増2度

I II III IV V VI VII I  
導音

そのため、旋律が音階各音を順次上行すると、VI・VII(導音)の2音間だけがかけはなれているように感じる。私はこの和声短音階をアラビアと呼んでいる。(雰囲気ね)

上行、下行をピアノや楽器で演奏してみると、私たちの文化にはない感じがします。私はこの雰囲気が好きです。このへだたり感はポップスの中でも使われていてエキゾチックな雰囲気になっています。

この原因となる増2度をとり除き、隣接する音階各音へのへだたりが、長2度または短2度になるようにするため、音階の第VI音を臨時記号によって半音高くすることが行われる。その結果、VI・VII(導音)およびV・VIの2音間はそれぞれ長2度となって増2度はなくなる。

長2度 長2度

I II III IV V VI VII I  
導音

臨時に半音高くされたVIIは、短音階本来のVIではなくなるが、音階の他の音によって短音階の特質は十分保たれる。**旋律短音階**には上行と下行が存在する。下行する時には導音の必要がない。したがって、VIを臨時に変化させる必要もなくなるから短音階の原型(**自然短音階**)を用いる。

このように、短音階にあって、旋律が音階各音を順次上行し、導音の必要が生じた時、VIIだけでなく、VIも臨時に半音上げ、順次下行する時には**自然短音階**にもどるものを**旋律短音階**という。

	長	長	短	長	長	短	
上行	2	2	2	2	2	2	下行
	度	度	度	度	度	度	



I II III IV V VI VII I I VII VI V IV III II I

上行はVIとVIIを半音上げ、下行は元に戻すと覚える。

Aを主音とする旋律短音階(a moll)

	長	長	短	長	長	短	
上行	2	2	2	2	2	2	下行
	度	度	度	度	度	度	



I II III IV V VI VII I I VII VI V IV III II I

長音階と**旋律短音階**を比較した場合、第III音だけが異なることに気が付いたろうか。**旋律短音階**の上行にあたっては、短音階の特質はIIIによって保たれるのである。

短音階の3種類はよく理解して欲しい。次回からは「調」に入ります。